

周恩来首相なきあとの中国の政治情勢がにわかに流動化し、いわゆる「走資派」批判が激発した。

今回の「走資派」批判は周知のように、鄧小平副首相らの旧実権派や、いわゆる実務派行政官僚を批判する運動である。しかしそこに、毛沢東以後の中国へ向けての指導権をめぐる深刻な角逐が存在することは、もはや明りようである。同時にまた、中国の国内建設の方針をめぐって、文化大革命以来、というよりは、毛沢

実権派を定義して

——実権派とは、「毛沢東思想」の絶対化過程における批判と抵抗の非連続な総体（拙著「現代中国論」）

と述べたことがあるが、今回、批判されている「走資派」も、この点において、まさに形を変えた実権派にほかならない。

毛沢東主席自身は最近

「安定と団結をはかるということとは、階級闘争をやらぬということではなく、階級闘争

● 外交時評 「走資派」批判の帰すう

中嶋嶺雄（東京外国語大学助教授）



東主導の「大躍進」政策が骨折し、いわゆる経済調整政策が実権派によって推進された六〇年代初頭以来の路線対立が、深く根を張っていることも明らかになっている。

この意味で、「走資派」批判はまさに「プロレタリア文化大革命の継続と深化」だといえるのであり、その半面において、文化大革命を経過したにもかかわらず、「毛沢東思想」を絶対化する文革路線にたいして、いかに根強い批判が存在しているかを物語っている。私はかつて

は網のすべてであり、そのほかはいずれも網の目である」

との最高指示を発し、文革初期と同様に「絶対に階級と階級闘争とを忘れてはならない」

と強調したそうだが、そのような状況のなかでさえ「右からの巻き返し」の風潮」が大きな潮流となり、彼らは政治、思想、組織の面から

——プロレタリア文化大革命を否定し去り、の化大革命の結論をくつがえし、文化大革命をかたをつけようとしている（「人民日報」三

月十日付社説「巻き返しは人心を得られない」ほか）
というのである。

やはり、中国内部の路線闘争が依然としていかに深刻であるか、文革派への批判と抵抗の潮流がいかに根強いかを物語っているといえるだろう。

私は今回の「走資派」批判は、むしろこのような「巻き返し」の潮流の根強さにたいする文革派の危機感から発生したと考えている。しかも、「走資派」の経済主義路線は、中国の工業化、農業近代化、国防・科学技術の近代化といった課題をとってみたときに、中国の今日の社会的・国家的要請を反映するものとして妥当性の高いものであるだけに、このような客観的条件が「走資派」の潜在的基盤になり得るのであり、ここにも文革派の危機感が存在しよう。毛沢東以後の中国が近づきつつあるという時間的な切迫感のなかで、時はむしろ「走資派」に利するのではなからうか。

果たして、すでに二カ月に近い「走資派」批判にもかわかわらず、「あの悔い改めよう」といふ「走資派」は依然として失脚していないようであり、国務院、人民解放軍、各工業部門での彼らの潜在的基盤はなお崩壊していないようにみえる。「走資派」はいま、じつとあらしの過ぎ去るのを待っているのではなからうか。